スウェーデン便り（７）　　橋本白道（陶芸家）

［発行日］＝1999 年 12 月 14 日

［本文］

ヘリデンを卒業したらどうするかと訊（たず）ねたら、答えは十人十色である。大学へ進む人もいることはいるのだが、ある種の専門分野に関して言えば、大学は非常に、あるいは異常に狭き門である。例えば陶芸の場合は毎年、ストックホルムに五人とヨーテボリに五人の計十人しか入学できないらしい。

しかも、大学で五年間勉強したあとも、この国ではプロへの道は大変険しい。まずもって、プロの陶芸家というものが、職業として成り立たないという。物を作って売り、そのことで生活を支えてゆくという基盤がほとんどないらしい。せっかく難関を突破しても、卒業後、半数の者は他の職業へと移って行き、残った者も企業にデザイナーとして入るか、学校のような所で週に何日か教えて生活を支え、あとの時間で自分の制作に向かう、というやり方が多いと聞いた。

それにしても、全国で毎年十人しか入れない大学に入った人というのは、スーパーエリートにちがいない。ヘリデンのカタリーナ先生は、そのスーパーエリートの一人である。しかも、様々な職業体験のあと、かなり高齢になってからの入学である。

入試はヘリデンと同じように、学校を選んだ動機などを書いた小論文、デッサン、履歴書（成績なども含む）などを送り、書類選考のあと面接を受ける、という段取りである。ヨーテボリ大学の場合、二百人くらいが申し込み、十人くらいが面接（作品も）まで進み、最終的に五人に絞られる、とトーヴが話してくれた。

カタリーナ先生がヘリデンに赴任して以来、ヨーテボリ大学に毎年のように生徒が受かっているとなれば、リニアのように、遠くストックホルムあたりからでも生徒が来る。しかも、シルバー（銀細工）やテキスタイル（織物・染色）からも大学に入る者がいて、去年はヨーテボリに三人と、ストックホルムに一人の計四人が入学したとなれば、ヘリデンというアートスクールは、一体どの街にあるんだという話になる。かといって、あちこちから生徒がどっと集まるということは、決してない。そこがどうも日本と違って、よく解（わか）らないところなのだが、今年の陶芸の一年生の場合、リニア以外は私も含めて全員、オジンとオバンばかりで、大学に行こうと思っている者などいない。

今年は（といっても、入学は来年の九月）、デービッドが大学に挑戦するだろう。トーヴは大学進学をあきらめたという。彼女はこの夏、モスクワ大学でロシア語を二カ月間学んできた。日本からも、たくさん来ていたらしい。ヘリデンを出たら再びモスクワへ行くと言っている。

その狭き門の大学へ、一日講義をしに行く気はないかとカタリーナ先生に訊ねられた。そっちの方はあまり気が向かないが、どんな天才たちが集まっているのか、とにかく一

度、遊びに行ってみようかなと思っている。